

第4節 ベンショ塚古墳出土農工具の評価

本節ではベンショ塚古墳出土の農工具の構成を概観した上で、その時期的な位置づけをおこなう。

第1項 第1埋葬施設

攪乱土中から鉄鎌 13 点が出土した。完形品は全長 8.8cm を測る曲刃鎌が 1 点のみで、その他の破片資料は身部幅が 2 cm を超えず、厚みは 0.2cm 前後である。実用品として考えるには小ぶりかつ薄手であるが、基部に木質が付着する個体もみられ、着柄状態で副葬されている。このことから、儀礼行為の中で用いられるミニチュア品（魚津 2003）の可能性が指摘できる。木質の付着や折り返しから基部が確認できる個体は 9 点あり、副葬個数は 10 点前後以上に復元される。

第2項 第2埋葬施設

西小口付近に配置された短甲内部から有肩鉄斧 1 点、鑿 4 点が出土した。有肩鉄斧の最大刃部厚は 1 cm 前後と重厚感があり、刃先中央が凹んでいることから実際に使用された可能性がある。刃部の平面形は横長で直角に近い肩部を有し、中期中葉以前を中心にみられる型式である（野島 1995）。

4 点の鉄鑿の内 1 点は有肩有袋鑿、3 点は有茎鑿である。有肩有袋鑿は他の 3 点と比べ幅広かつ重厚な刃部を有する。袋部の合わせ目は密着しており、中期後半に多くみられる型式である（魚津 2005）。

有茎鑿の中では 93・94 は幅広かつ厚手の刃部を持ち、茎部は短い。一方、95 の刃部幅は狭く、茎部が全長の半分を占めており、長い柄が装着されたことが窺える。有茎鑿に関しては中期前半を中心に薄手の刃部や「ねじれ」を有する個体の存在が指摘されているが（魚津 2000）、当例ではいずれの鑿も実用に耐え得る構造をしており、これには該当しない。

刃部幅や茎部長からは加工の範囲や着柄方法における差異が示唆され、それぞれの鉄鑿が異なる機能を有することが想定できる。第2埋葬施設では多様な機能を持つ実用の工具セットが副葬されている可能性が指摘できよう。

第3項 農工具をめぐる分析的視座

上記より、ベンショ塚古墳の副葬農工具については埋葬施設間で実用性に関わる性格に差異がみられた。以下では古墳時代中期における農工具の副葬様相に着目し、その時期的変遷を整理した上でベンショ塚古墳出土農工具の位置づけを検討する。なお、対象器種は副葬事例が

豊富な鉄斧と鉄鎌に絞り、まずは実用・非実用に関する先行研究を中心に概観する。

当古墳の第1埋葬施設から出土した鉄鎌についてミニチュア品である可能性に言及した。これらの先行研究を遡ると、小型かつ薄手の鉄製農工具が非実用品（ミニチュア）として評価されることはある（都出 1967 他）。これに対し寺沢薰らは、ミニチュア品の定義として刃部や着柄機能の退化や欠如に着目しており、小型品 = 非実用品とは必ずしもならないことを指摘している（寺沢 1991 他）。

以上の議論の再整理をおこなったのが魚津知克である。魚津氏は薄い鉄板を素材とする「薄板系農工具形鉄製品」を抽出した上で、刃部や着柄機能など実用に関連する属性を有するものを儀礼行為の中で用いられる「農工具用祭器」とした。一方で、上記の属性が退化・欠落し、道具としての使用が不可能なものは「農工具形祭器」として、用途に基づいた分類を提示している。加えて、これらのミニチュア品では副葬品目や副葬数の合計が重視されることを指摘している（魚津 2003・2019）。

上記より、単なる法量だけではミニチュア品と実用品の判断は難しいということがわかる。製作技術のレベルや素材の特徴が判断材料となる中で、比較可能な属性が多い鉄斧にはこの考え方は当てはめやすい。一方、製作方法・形状ともに単純な鎌に関しては判断材料となる属性が少なく、実用・非実用の境界は不明瞭にならざるをえない。

古墳時代中期の農工具研究ではミニチュア品の副葬動向が着目されやすいが、その定義が曖昧である以上、これに基づいた時期的変遷の検討には慎重になる必要がある。そこで、本節では実用品の可能性が高い大型の鉄斧・鉄鎌を抽出し、ミニチュア品と併せてその副葬動向の整理を試みる。

第4項 農工具副葬の時期的変遷（表4）

紙幅の都合上実用品の抽出に関する詳細な説明は省くが、鉄斧では有肩鉄斧と全長 15cm を超える無肩鉄斧、鉄鎌では全長 15cm 以上の大型品を実用品とした（ただし魚津氏が設定した「薄板系」の事例は除く）。古墳の時期については出土した埴輪や土器類、鉄鎌等から整理をおこなった（小浜 2003 他）。

1期（埴輪編年Ⅱ期2段階～Ⅲ期1段階並行）

和泉黄金塚古墳のように有肩鉄斧を複数副葬する例が広域的にみられ、大型鉄鎌の副葬例も西日本を中心に分布している。一方、交野東車塚古墳のように有肩鉄斧と

表4 古墳時代中期における鉄斧・鉄鎌の副葬動向

時期	古墳名(埋葬施設名)	副葬個数		実用品の有無	
		鉄斧	鉄鎌	有肩鉄斧	大型鉄鎌
1期	和泉黄金塚(東)	9	-	●	
	和泉黄金塚(中)	9	7	●	
	金藏山(副)	11	19	●	●
	老司(1)	3	1	●	●
	老司(3)	11	3	●	
	鋤崎	2	1	●	●
	長良龍門寺	2	1	●	
	交野東車塚	17	22	●	
	兵家6号(東)	1	-	●	
	兵家6号(西)	2	5	大型無肩	●
2期	遊塚	2	4	●	
	行者塚	7	15	●	●
	茶すり山(1)	4	-	●	
	茶すり山(2)	10	13		
	盾塚	10	10		
	豊中大塚(2)	10	20		
	西墓山	139	237		
	恵解山	36	5		
	宇治二子山北(中)	14	22		
	宇治二子山北(北)	16	25		
3期	私市円山(2)	7	5		
	五ヶ山B2	6	7		
	遠江堂山	11	28	大型無肩	●
	堂山1号	5	5		●
	アリ山	134	201	●	●
	珠金塚(南)	7	10	●	
	五條猫塚	5	1	●	
	ベンショ塚(1)	-	9		
4期	ベンショ塚(2)	1	-	●	
	原間6号	3	1	●	
	下北方5号	9	3	●	●
	野中	30	2	●	
	カトンボ山	57	-	●	
	おじよか	5	2	●	●
	隨庵	5	2	●	●

ミニチュア鉄斧が併存する事例も確認できる。

2期(埴輪編年Ⅲ期2段階並行)

畿内では有肩鉄斧や大型鉄鎌の副葬例はほとんどみられず、西墓山古墳に代表されるようなミニチュア品のみの多量副葬事例が目立つ。これに対し、畿内周縁部や東海では実用品の副葬事例も確認される。

3期(埴輪編年Ⅳ期1段階並行)

前段階に引き続きミニチュア品を主体とした多量副葬は継続するものの、堂山1号墳や珠金塚古墳南櫛のようにミニチュア品と大型品の両方を同一の埋葬施設内に副葬する事例もみられるようになる。

4期(埴輪編年Ⅳ期2~3段階並行)

ミニチュア品のみの多量副葬例はみられなくなり、鉄斧では有肩鉄斧を含めた実用品を主体とした組成が目立つ。副葬個数は3期以前と比較すると減少しており、特

に鉄鎌ではこの傾向が強い。

第5項 ベンショ塚古墳の位置づけ

以上では実用品と考えられる大型の鉄斧・鉄鎌に着目して副葬動向の整理をおこなった。2~3期では実用品は主要品目にはなり得ず、ミニチュア品の多量副葬事例が目立つ。続く4期にはミニチュア品副葬は一部で継続するものの、実用品が構成主体を占め、副葬個数も減少傾向にある。農工具副葬において「量」よりも「質」が重視されるようになっており、副葬構成に変化が見受けられる。

出土埴輪からは3期に位置づけられるベンショ塚古墳であるが、第1埋葬施設では薄板系の鉄鎌が少なくとも9点副葬されており、ミニチュア品を多量副葬する点で当期の特徴と一致する。一方、第2埋葬施設では有肩鉄斧を含む実用の工具セットが少数副葬され、4期の特徴を備えている。各器種の型式も中期中葉から後葉に位置づけられ、整合的に理解ができる。よって、後者の農工具の構成は前者よりも新しく位置づけられ、埋葬施設間に時期差が想定される。上述より、ベンショ塚古墳出土農工具からは古墳時代中期中葉から後葉にかけての過渡的な様相が副葬構成と各器種の型式学的特徴の両面から読み取れるといえよう。

(樋口)

参考文献

- 魚津知克 2000 「鉄製農工具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』 鉄器文化研究会
- 魚津知克 2003 「鉄製品群の検討」『史跡 昼飯大塚古墳』 大垣市教育委員会
- 魚津知克 2005 「鉄製農工具の副葬と農工具形石製祭器の副葬」『古代』 第118号 早稲田大学考古学会
- 魚津知克 2019 「鉄製農工具副葬における前期と中期のはざま」『鳥居前古墳』 大山崎町教育委員会
- 小浜成 2003 「円筒埴輪の観察視点と編年方法」『埴輪論叢』 第4号 墓輪検討会
- 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』 第13卷第3号 考古学研究会
- 寺沢薰 1991 「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』 第4巻 生産と流通 I 雄山閣出版
- 野島永 1995 「古墳時代有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』 第41巻第4号 考古学研究会